



典礼委員会担当司祭 菅原友明

今月のポイント

朗読者が「神のみことば」  
一同は「神に感謝」

長年の混乱もこれで決着か！

皆様の教会では、第一および第二朗読の終了後、どのような所作がなされているでしょうか？ 朗読者の唱える言葉が「神のみことば」だったり「神に感謝」だったり、あるいは沈黙だったりし、それに対する会衆一同の応答もまちまちかもしれません。多くの小教区で、この問題はたびたび悶着を引き起こし、議論が交わされ、一時的に統一されたとしても、いつしかまたバラバラになっていき、再び悶着がぶり返され…ということの繰り返し

しで、もはや何が正しいのか誰にもわからず、最近ではあえて誰もこの問題を口にしないことが暗黙の了解になっていく感もあります。無理な統一をあきらめるといふこの現状は、多様性と豊かさが尊重される時勢にも適い、一つの見事な到達点なのでしょう。

もともとラテン語規範版では、明確に、朗読者が「神のみことば」と唱え、一同が「神に感謝」と唱えたと規定されており、これに従う限り議論の余地はなかったのですが、典礼を各国の文化に適したものとするための努力工夫がなされなければなりません(※1)。これが「日本への適応」と呼ばれる要素です。今回の改訂では、現行版に採用されていた日本への適応(※2)が、上述のような混乱や不一致を引き起こしていたことを反省し、朗読者が「神のみことば」と唱え、一同が「神に感謝」と唱えたと、ラテン語規範版に従うものに改められました。結果的に大きな回り道をしたことになりましたが、決して失敗でも無意味でもなく、この経緯の中で、日本の教会が学んだ豊かさ、深められた交わりは貴重な賜物です。

さらには、朗読後の言葉のやり取りはラテン語規範版通りになったとはいえず、引き続き、日本への適応も行われていきます。すなわち、この部分の全体は、「朗

読の終わりを示すため、朗読者は手を合わせてはっきりと唱える。『神のみことば』一同は答える。『神に感謝。』続いて朗読者は聖書に一礼して席に戻る。一同は沈黙のうちに、神のみことばを味わう」となっており、朗読後の静けさを演出するという日本への適応は生きているのです。

はるかな歴史を思うとき、神のみことばを聞けることは、決して当たり前のことではありません。それは復活者を目の当たりにするに匹敵する奇跡と言えるでしょう。聖霊によるこの恵みを神に感謝し、沈黙のうちに、聞いた聖書の言葉を深く味わいましょう。

※1 第2バチカン公会議『典礼憲章』では儀式について「ローマ典礼様式の本質的統一を保ったうえで、特に宣教地において、それぞれの集団、地方、民族への順応と正當な多様性の余地が残されなければならない」(37)とうたわれています。

※2 現行版日本語ミサ典礼書では「朗読者は朗読の終わりを示すため聖書に一礼する。奉仕者は『神に感謝』と答える」と記されています。